2025年9月18日(木)
中国新聞SELECT掲載

被爆80年
リレーエッセー

パレスチナ解放機構（PLO）難民問題局副局長　アンワール・ハマム
広島の経験　未来への希望に

国際協力機構（JICA）が推進するパレスチナ難民キャンプ改善プロジェクトの一環で、難民問題局代表団の一員として日本を訪れた。互いの経験、歴史の深みから得た教訓に学ぶことが目的だが単なる研修旅行ではなかった。地域開発、危機管理、災害復興の分野における日本独自の経験を深く学ぶ機会であり、特に最初の訪問地、広島は特別な意味を持っていた。

広島は歴史と人類、世界の良心に深い影響を与えた都市であり、パレスチナ人の意識の中でも重要な場所である。滞在中、広島の経験の本質を体現する多くの機関や人物と会合を持った。原爆資料館（広島市中区）では破壊と希望のそれぞれの物語が融合する場に触れ、広島市の職員とはゼロからの都市再建の経験を共有させてもらった。

被爆した学校では、現代における悲劇の証しとして、壁に残された生徒たちの落書きが私に語りかけてきた。子どもたちを支援し、貧困層に食料を提供する団体も訪問し、日本人の道徳観に触れた。日本人の性格、強さ、存在感、そして独自の影響力を形成する重要な要素であると感じた。

広島とガザには心を揺さぶる共通点がある。悲劇の大きさ以上に注目すべきは両者が経験した「回復力」と「生存への意志」の物語だ。避難、破壊、そして甚大な人的被害という苦しみを経験しても日本人は悲劇に屈しなかった。パレスチナ人も屈していないし、今後も屈することはない。

灰と破壊の中から命は再び芽吹き、勤勉さ、忍耐、そして地域社会の精神に基づいた、より強く、より組織化された社会が築かれていくのだ。今回の旅は「意志の力」と「回復力」がどんな悲劇も成功の物語へと変えることができるという、パレスチナ人への明確なメッセージでもあった。

日本人が広島を平和と希望の世界的象徴へと変えたように、私たちもキャンプの未来を築いていくことができる。それは過去や権利を忘れることなく、人間への敬意と未来の再建と計画への参加に基づいた新たなパレスチナ的アプローチを確立するものなのである。

随時掲載します